

鞍馬二ノ瀬の「白龍園」を訪ねて

藤原 道夫

今年2月に大型書店の園芸コーナーで『しかけに感動する京都名庭園』を見つけ、即求めた。著者は烏賀陽百合さん、国内外で造園について学び、今は京都で庭園デザイナーとして活躍している方。2017年にニューヨーク・グランドセントラル駅構内に石庭を造って話題となった。本で21か所の庭園をとり挙げ、写真とともに自らの感想を述べている。それらの中に白龍園という聞いたことのない庭園が入っている。京都在住の実業家が鞍馬に近い二ノ瀬の荒れた山を買い取り、自ら造園に励んで公開するまでに仕上げたとある。興味が湧き、3月になって入園を申し込むと間もなく入園許可証が届いた。

3月下旬の雨の降る肌寒い日、10時前に叡山電鉄二ノ瀬駅で降りた。一人だけだった。いきなり急な階段を下る。人気がなく、何の案内板もない集落の細い道を5、6分進むと檜皮葺（実際は杉皮葺）の家屋が見えてきた。それが白龍園管理棟の河鹿荘だった。

簡単な庭園の説明と注意事項があって入園、同行者は計4人のみ。苔の間の飛び石伝いに進み、石段を登った所で景色を眺めた。山々が迫ってくる。風景全体が灰色の中に赤茶っぽい色を滲ませたよう、この色合いが早春の気配を感じさせてくれる。水音が響く。谷あいの上の方からいくつもの滝や急流を作って川が流れ落ちているのが見渡せた。川沿いに奥の赤い鳥居まで行き、小さな白龍神社を見上げた。昔あった二つの神社をまとめて再興したとか。辺りに靈気が漂っているのはこのせいかな。他の庭園では経験したことのない雰囲気だった。

河鹿荘に戻り、入園前に説明していた方と話す。3代目社長さんで、祖父がこの園を開いた時の苦労話を熱っぽく語ってくれた。重機のない時代、全て人力に頼ったとか。現社長自らも小さい頃に手伝いをした記憶があるという。そのような作業は苦労が多かったに違いないが、「さぞかし楽しかったでしょうね」と応える。

烏賀陽さんは白龍園の説明にヘッセの『庭仕事の愉しみ』を引用している。「…その生活の根底をなすものは、信仰であり、大地、水、空気、四季の神性に対する、植物と動物の諸力に対する信頼だ」なるほど、仕事に携わった人が最もよく感じることだろう。せめてもお裾分けに預かりたい。そのような思いと共に、新しく造園するには美意識も問われるところ。次回は錦秋の日に訪ね、四阿に腰を下ろして全感覚を働かせて自然に囲まれた庭園の雰囲気をじっくり味わおうとしよう。庭園の在り方に関してヒントが浮かぶことを期待して。